

16. 歯学部附属病院歯科医師臨床研修科活動報告 第1報

○川上 智史****, 平井 敏博**,* , 小鷲 悠典****, 池田 和博****, 小島 雅彦*****
 (*北海道医療大学歯学部附属病院歯科医師臨床研修科・**北海道医療大学歯学部附属病院・
 北海道医療大学歯学部歯科保存学第1講座・*北海道医療大学歯学部歯科保存学第2講座・
 *****北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座・*****北海道医療大学歯学部附属病院事務課)

本年4月、本学歯学部附属病院に歯科医師臨床研修科が設置された。本院では、平成10年から、病院長が責任者となり、「複合研修方式」による歯科医師臨床研修が行われてきている。しかし、研修医は各診療科での指導に依存してきたため、一般歯科診療に必要な総合的な診療能力に偏りが生じることが危惧されていた。また、平成18年から必修化となる卒直後の臨床研修をより意義あるものとするため、病院運営会議をはじめとする関連会議・委員会で多くの議論がなされてきた。そして、「臨床研修の管理・運営の一元化」が不可欠であるとの結論から、本科の設置に至った。なお、本年度は14名の研修医を受け入れ、臨床研修を実施している。臨床研修の管理・運営に加えて、今年度の本科の活動は以下の通りである。

研修指導医の資質向上を目的として、8月25・26日の2日間、本院ならびに「従たる施設」の指導歯科医27名を対象とした指導歯科医講習会を開催した。その内容は、厚生労働省と歯科医療研修振興財団が主催して、毎年3

泊4日の日程で富士研修センターにおいて開催されている「歯科医師臨床研修指導医ワークショップ」に準じたものであった。すなわち、教育手法に関する講義を実施した後、ある1つのテーマについてSmall group discussionと全体討議を重ねることにより、最終的に与えられたいくつかのテーマについての教育指導評価システムを構築するものである。9月21日(金)に、本院歯科医師臨床研修医を対象としたOSCE (Objective Structured Clinical Examination) を施行した。OSCEとは、1975年に Hardenらによって提唱された、診療に関する技能および態度を適正に評価する試験方法であり、医学部・歯学部の臨床実習開始前試験として来年から試験運用される共用試験で、CBT (Computer Based Testing) とともに実施される予定である。

今回は、歯科医師臨床研修科が今年度に行った2つの事業の概要と今後の展望について報告する。

17. 歯学部附属病院地域支援医療科活動報告 第1報

○越野 寿***, 関井 紀晃*, 平井 敏博***, 川上 智史*, 吉野 夕香***
 (*北海道医療大学歯学部附属病院地域支援医療科・**北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座・
 ***北海道医療大学歯学部附属病院事務課)

本学歯学部附属病院は地域からの要望に応えるべく、平成7年5月に訪問歯科診療班を組織・稼動し、平成12年4月には、本班専任の歯科医師、歯科衛生士の各1名を配置し、「訪問歯科診療班」として組織の充実を図った。さらに、平成12年11月には附属病院機能の向上を目指して、総合診断科、歯科医師臨床研修科とともに、地域支援医療科が新設されるに当たって、「訪問歯科診療班」は「訪問歯科診療室」と改称された。地域支援診療科が担う活動は、以下の通りである。

1. 訪問歯科診療への取り組み：本院は、平成7年5月地元当別町と「寝たきり老人等訪問歯科事業」の委託契約を締結し、本格的な訪問歯科事業を開始した。さらに、平成8年度からは、岩見沢歯科医師会との間で「高齢者在宅訪問歯科事業に関する診療支援」を締結

するなど、訪問歯科医療への取り組みを充実・発展させてきた。現在では、活動地域を近隣市町村にも拡大するとともに、札幌歯科医師会との後方支援体制を確立し、地域社会に貢献している。

2. 災害地歯科診療への取り組み：平成5年7月に発生した北海道南西沖地震の被災者に対しての歯科診療班の派遣、平成7年に発生した阪神淡路大震災の被災者への歯科診療を行う際の情報提供、平成12年3月に発生した有珠山噴火災害の被災者への歯科保健班の派遣など、本院は災害時の歯科的活動に積極的に参加してきた。

3. サテライトクリニックへの取り組み：本学は、昭和59年9月、過疎地歯科医療への貢献を目的に、サテライトクリニックとして、浦臼町歯科診療所を開設した。

さらに、平成2年8月には、社会福祉法人緑星の里内に歯科診療室を設置した。このように本学においては、福祉施設等を通じた地域社会への貢献も積極的に展開してきた。

以上のごとく、地域支援医療科の担うべき活動は多岐にわたるが、今回は、訪問歯科診療と災害地歯科診療に関する活動報告を行う。

18. 歯周治療学臨床実習における相互実習の学習効果

○池田 雅美, 森 真理, 室 三之, 吉田 拓司, 加藤 幸紀, 富岡 純, 小林 孝雄,
有路 博彦, 望月 研司, 藤原 純, 伊藤 泰城, 山崎 厚, 杉村 典彦, 中島 啓介, 小鷲 悠典
(北海道医療大学歯学部歯科保存学第1講座)

【目的】 学生がプラークコントロールの重要性を理解するためには、歯周基本治療による歯肉の改善を観察することが有効である。本研究の目的は歯学部臨床実習において互いに口腔清掃指導を行う相互実習の学習効果について検討することである。

【方法】 北海道医療大学歯学部臨床実習生85名か2人1組でお互いに術者と患者になり、Loe & Silnessの歯肉炎指数(GI)、ポケット深さ、Millerの歯の動揺度の診査、O'learyと川崎式のプラーク付着指数の診査を行った。治療計画を立案後GIが0になることを目標に学生が口腔清掃指導を行い、インストラクターがその補足を行った。目標達成後スケーリングを行い、その後再評価を行った。また、実習終了後には毎回学生とインストラクターでブラッシングに関するディスカッションを行った。85名全員に対して行ったアンケートに基づいて学習効果を判定した。

【結果および考察】 2～6回のブラッシング指導でO'

LearyのPCRは $54.7 \pm 24.3\%$ から $11.6 \pm 10.0\%$ 、川崎式歯垢指数は $31.3 \pm 16.0\%$ から $5.4 \pm 5.2\%$ と減少した。GIは初診時 1.27 ± 0.63 から 0.07 ± 0.10 と改善した。アンケートの結果から、プラークコントロールの重要性について基礎実習時よりもよく理解できたと回答した学生が多いことが明らかとなった。そしてブラッシング指導が難しかった部位とGI値の下がりにくい部位を再認識することができた。また、学生同志でもモチベーションを得ることが難しかったので外来患者に対する指導に不安を感じるとの回答も認められた。しかし、大部分の学生が将来歯科医師になった時にこの体験を生かして患者さんに口腔清掃指導を行いたいと回答していた。

以上の結果から、プラークコントロールの重要性を相互実習で学習するのは有効であると考えられた。今後は、外来患者の口腔清掃指導などの実践的な実習の効果について検討する予定である。

19. 臨床実習における形成的評価の検討 ～個人内評価表を導入して～

○岡橋 智恵, 大山 静江, 長田 真美, 沢辺千恵子, 小田島千郁子, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

【目的】 本校では、学生を継続的に捉える形成的評価として学習過程を重視する評価観に基づき個人内評価表を作成し導入している。

今回は、形成的評価として導入した、個人内評価が学習の動機付けとしての機能を果たしているかについて検討したので報告する。

【方法】 方法は指導者が記入した評価集計と学生のアンケート調査の双方向で分析した。対象は平成11年度と12年度の第2学年、93名である。

【結果】

・実習全般の指導者側の評価視点は知識の獲得や技術の向上による学生個人の力量の形成や提出物などを重視しており、学習態度の項目では学習意欲・規律・礼節についてが多く、患者援助の項目ではほとんど評価されないという偏りが見られた。

・学生のアンケート調査の結果

①「到達レベルの確認と次回実習への手がかり」について、努力した59%、どちらでもない25%、思わない10%であった。

②「やる気」について、やる気につながった76%、どち